

# 自主的学習を軸にした授業で、子どもが自ら学習改善を図れる学習評価を目指す

## 神奈川県 横浜市立白幡しらばた小学校

神奈川県横浜市立白幡小学校では、2018年度に、観点別学習状況評価を4観点から3観点へと移行させた。約10年にわたり実践研究を積み重ねてきた「自主的学習力」を育成するための評価手法を生かして、子ども自身が学びを振り返り、次の学びに生かす力を高めている。



© 1936年、横浜市白幡尋常高等小学校として開校。アクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改善と、カリキュラム・マネジメントを通じた組織改善を推進している。

校長 鈴木秀一先生  
 児童数 726人  
 学級数 26学級（うち特別支援学級4）  
 電話 045-401-4779  
 URL <https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shirahata/>



校長  
**鈴木秀一**  
 すずき・しゅういち

同校に赴任して2年目。



主幹教諭、研究主任  
**玉置哲也**  
 たまき・てつや

同校に赴任して8年目。

### 目標・指導・評価の一体化に向けて

#### 学習評価を充実させる鍵は 目指す子ども像の共有

閑静な住宅街に位置する神奈川県横浜市立白幡しらばた小学校は、家庭や地域の教育力が比較的高い環境にあり、子どもの学習態度も落ち着いている。同校では、2008年度から継続して、子どもが自ら問い、自己選択・自己決定をしながら学びを進める「自主的学習力」を育む実践研究を進めている。

2018年度には、学習評価を4観点から3観点へと移行させた。研究主任の玉置哲也たまき先生は、その理由を次のように説明する。

「観点別評価が育成を目指す資質・能力の3つの柱と対応する形で整理されたことで、教員が指導のねらいをより意識しやすくなったと感じました。そこで、移行措置の段階で3観点を採り入れることにしまし

た。1年間実践してみて、学習評価を授業やカリキュラムの改善に生かしやすくなったと思います」

学習評価において同校が大切にしているのは、学校教育目標や目指す子ども像を全教職員で共有することだ。2018年度は、夏季休業期間中に全教職員で、自分たちが育成を目指す子どもの姿を話し合った。学校教育目標の「たくましく生き抜いていく子ども」とは、具体的にどういった姿なのか、教員一人ひとりが考えを述べ合い、それらを整理した。そして、2019年度に育成を目指す子ども像を、「挑戦する子」「受け入れる子」「判断実行する子」「目標を立てられる子」「やりぬく子」の5つに具体化した。

「学習評価は、子どもが自ら学習改善を図れるように行うべきだと思います。評価によって、子どもは次は何を学ぶべきかが分かること、教員はそのためにどういった手立てを行えばよいのかを把握できることが重

要です。その際に学校教育目標が明確でなければ、教員の評価の足並みがそろいません。教員全員で話し合い、目標を明確にして共有することは、適切な学習評価を策定するために必要不可欠であると考えました」（玉置先生）

鈴木秀一校長は、そうした教員間の対話は、子ども観や授業観、教育観をすり合わせる場として価値ある取り組みだと強調する。

「自校の目指す子ども像と、それを具現化する授業のイメージを共有することで、新しく赴任してきた教員も、指導と評価の足並みをそろえることができます。数年で教員が入れ替わる公立学校であるからこそ、対話は非常に意義深いと実感しています」（鈴木校長）

2019年度は対話の場を日常的に

持とうと、事務連絡を電子掲示板で共有するなどの工夫をして時間を捻出し、月1回の職員会議を教員の対話の場とした。「自主的学習力」を身につけた子どもとはどのような姿なのか、思考が深まる言葉のやり取りとはどういった対話を指すのかということを、ワールドカフェ方式\*1で約1時間話し合う。そして、自身の気づきをワークシートにまとめ、学校のサーバー上で全教職員が共有している。

### 主体的に学習に取り組む態度の育成と評価

## 既知と新知の言語化により、自身の単元目標を持たせる

同校では、子どもが自ら学習改善を図れるように、学習の動機づけと学習過程の整理を行うための思考ツール「K・W・Lチャート」を用いている。K・W・Lは、それぞれ「Know(既知)」「What(新知)」「Learn(学んだこと)」を意味する。具体的な授業の進め方は、次の通りだ。

まず単元を始める際に、単元や教材に関して既に知っていること(K)、これから知りたいこと(W)を子どもに挙げさせて、模造紙に書き出す。目標を明確にした上で、その達成のためにはどうすればよいか、子どもと教員が対話しながら学習計画を立てる。そして、学習が進む中で「W」

から「K」へと移行したものは、学んだことの「L」の欄に記入する(写真1)。

そのように、単元の冒頭に学習目標や学習プロセスの見通しを持たせ、また学習の途中でも既知と新知を整理することで、子どもは主体的に学習に取り組めるようになる。教員はそうした子どもの姿を見取り、評価をしている。

そして、この「自主的学習力」の評価を、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に生かしている。

『「K・W・Lチャート」』の作成を通して、子ども自身が単元における自身の目標(W)を持ち、その達成に向けて試行錯誤を繰り返しながら、粘り強く学ぶようになります。さらに、目標に対して今はどの段階か、次に必要な学びは何かを見極め、実行する中で、自己調整力もついてきます。つまり、『自主的学習力』には、『主体的に学習に取り組む態度』の2つの側面である『粘り強く取り組む』と『自己調整』が含まれているのです。そこで、『主体的に学習に取り組む態度』の評価に、これまでの研究成果を生かしています(玉置先生)

なお、低学年では「K・W・Lチャート」を使わない場合もあるが、その際も単元や授業の初めに目標(W)を明らかにするといった考え方は同じだ(写真2)。

## 子どもの振り返りも3観点を意識させる

「自主的学習力」の育成・評価に向けて、同校ではどの単元も第1～3次の3段階に分け、各段階の意図に応じた指導の工夫をしている。

1～2時間目の第1次では、「K・W・Lチャート」の作成を通して子どもの「W」と「K」を明確化し、学習計画を立てる。ここでは、子どもの「W」をより具体化させるために、外部講師を招くことがある。例えば、6年生の国語の単元「プレゼンテーションを学ぶ」では、プレゼンテーションの専門家に招き、その手法を見せることで、理想のプレゼンテーションに近づくために必要なことを具体的にイメージさせた。

3～9時間目の第2次は、第1次で立てた学習計画を実行する段階で、自分たちが挙げた「W」を学んでいく。教員の講義形式ではなく、課題について子どもが調べ学習をしたり、話し合ったりする活動が中心となる。

そして、10～12時間目の第3次では、自身の学びを振り返って学習内容をまとめる。その際、「K・W・Lチャート」の「W」に挙げた内容が達成でき、「L」に移行できているかを重視することに加えて、3観点的評価規準を意識して振り返るように子どもに促している。

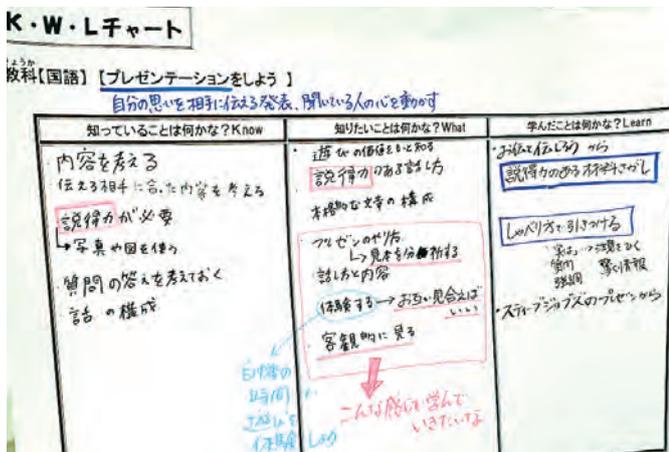


写真1 6年生の国語「プレゼンテーションをしよう」の単元では、「K・W・Lチャート」を用いて、知りたいことに「説得力ある話し方」「プレゼンのやり方」などを挙げた。



写真2 2年生の国語では、異学年交流会で1年生が楽しめるように「お話クイズをする」とこととなり、楽しめるクイズをつくるための方法をみんなで考えた。写真は、その方法を黒板に書いているところ。

\*1 話し合いの手法の1つ。参加者が小グループに分かれて話し合った後、指定の時間になったら各グループ1人を除いて、新しいグループを構成し、同じテーマで話し合う。その際、残った1人が前のグループで話し合った内容を新たなメンバーと共有する。そうしたグループワークを繰り返し、最後に最初のグループに戻って、それぞれが話し合った内容を共有する。

「振り返りの場面で、教員が『授業で分かったことを書きましょう』と言うと、子どもは知識・技能の部分だけを振り返りシートに書きがちです。しかし、3観点で評価するのならば、子どもにもその3観点で自身の学習を振り返らせなければ、その観点によって得たことをメタ認知できません。そこで、『めあてを達成するために、○○のラーニングスキル\*2を活用していたのがよかったね』『仲間と話し合いながら目標に向けて頑張ったことが重要だね』などと、教員の声かけによる価値づけをするようにしています」(玉置先生)

目標・指導・評価を一体化させるためには、教員の評価だけでなく子どもの自己評価にも、3観点を取り入れていくことが必要だと言える。

### 単元ごとに3観点を評価する工夫

## 単元のどこで何を評価するか 単元計画に場面と方法を明記

単元ごとに3観点での評価を行うための工夫として、指導案には単元の評価計画を具体的に記している。単元計画の冒頭に、単元の評価規準を3観点で明記し、「単元の指導と評価の計画」と「本時展開」には、具体的な評価規準を3観点の評価規準と関連づけるように記述。併せて、評価方法も記している。

その具体例を、6年生の国語の「登場人物の相互関係に着目して『ゲームのストーリー』を作ろう」(図2)で見よう。単元の評価規準の「ア 知識・技能」で設定された内容は、単元計画の第2次の評価規準では、「話の展開と登場人物の相互の関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している」とし、評価方法を「発言の分析、ワークシートの記述の分析、振り返りの記述の分析」としている。そして、具体的

図2 単元の指導案における、評価規準と評価方法の示し方(第2次の例)

2 単元の評価規準		ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
	1	物語の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。	「B 書くこと」 1 想像したことを書き表すための筋道の通った展開となるように、文章全体の構成や展開を考えている。 2 目的や意図に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 3 文章全体の構成や書き表し方に着目して、文や文章を整えている。	1 学習の見通しをもち、登場人物の相互関係などを図や語句を使って書き、自ら進んで文章全体の構成を考えたり、目的や意図に応じて書き表し方を工夫したりしながら書き、友達と書いたものを読み合って構成や書き表し方を整えようとしている。
5 単元の指導と評価の計画(全10時間)				
次	時	学習活動	指導の手立て(○)	評価規準(評価方法)
関連	開	○総合的な学習の時間でゲームクリエイターの話聞き、ゲーム作りの手順について取材する。 ○ゲームのコンセプトと関連付け、想像を広げて考える必要があることを理解する。 ○自分が作りたいゲームのコンセプトやゲームの	○同じコンセプト(テーマ)やゲーム形式を選択した児童同士でグループを組み、対象とする相手を決めておく。	○事件や出来事を一人一つ担当する。大まかな構成をもとに、自分が担当する順序を決め、前後の展開と関連付けながら考えるようにする。 ○登場人物の相互関係に着目して、話の展開と登場人物の相互関係などを図や語句を適切に使って表している。(発言の分析 ワークシートの記述の分析 振り返りの記述の分析)
	連	①大まかな構成と人物の相互関係を関連付けながら話し合う。 ②人物の相互関係を関連付けながら、具体的な話の展開を決めていくようにする。	○大まかな構成と関連付けながら、登場人物と登場人物の相互関係を考えている。(発言の分析 ワークシートの記述の分析 振り返りの記述の分析) ○登場人物の相互関係図をもとにグループで話し合い、プロットをまとめる。 アー1 話の展開と登場人物の相互関係など	アー1 話の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。(発言の分析 ワークシートの記述の分析 振り返りの記述の分析)
7	本	③電話のテーマ、話の展開、登場人物、登場人物の		
7 本時展開(7/10)				
		学習活動	指導の手立て(○)	評価(評価方法) ラーニングスキル(★) 思考操作
た	1	学習計画表を活用して、本時の学習課題を確認すると共に、学習の見通しをもつ。	○ これまでの学習で繰り返していることについて、児童自身で進められるように支援する。	
しか	2	教師が、これまでに学習した、物語の展開と人物の相互関係についてまとめたラーニングスキルを提示し、人物の相互関係に着目しながら、話の展開を決めるという本時の学習を確認する。	○ 本時で何を話し合うかを確認し、協働的に課題を解決できるようにする。	
め	話の展開と関連付けて、登場人物や登場人物の関係性を改善しよう。			
る	3	課題についてグループで話し合う。	○ 物語を分析する際に使ったポイントシートや、人物相互関係図のラーニングスキルを参考にして話し合う。	★登場人物が生きる「ゲームのストーリー」の作り方 展開と登場人物の特徴が関連付けられているかという視点で見合い、グループでまとめている。 関連付ける 展開と関連付けて登場人物や登場人物の相互関係を決めている。
り	①	自分が書いた話の展開の意図を伝える。	○ 話し合いがスムーズに行えるように、同じグループの友達が書いた事件とその解決の仕方について読んでおき、グループで話し合えるようにする。	
と	②	『冒頭部』から『結び』までを俯瞰し、それぞれの展開の中でどのように登場人物の相互関係が変化するかを考える。		
り	③	登場人物の相互関係に着目しながら、全体の展開を決める。		アー1 話の展開と登場人物の相互関係などの表し方を理解した上で、図や語句を適切に使って表している。 イー1 大まかな構成と関連付けながら、登場人物と登
ま	4	他のグループの展開を読み、よい点を称赞したり、課題について伝え	○ アドバイスをもらったことをもとに、グループの展開	

「2単元の評価規準」で、知識・技能を「ア」、思考・判断・表現を「イ」、主体的に学習に取り組む態度を「ウ」とし、「5単元の指導と評価の計画」や「7本時展開」では、その評価規準をさらに具体化し、対応する記号をつけて記載することで、何を評価するのかわかりやすく示している。

\*白幡小学校提供資料を基に編集部で作成。

\*2 同校が、学年間や教科間を貫く汎用スキルと、各教科固有のスキルを、カリキュラム・マネジメントの視点で整理して関連性を示したものの。

な評価の場面を、本時展開の評価（評価方法）の中に明記している。

最終的な学習評価は、授業中の見取りに加え、ワークシートや振り返りの記述、子どもへの聞き取り、ペーパーテストなど、複数の組み合わせの結果から総合的に判断する。

玉置先生は、学習評価を一気に変えようと気負わない方がよいと語る。

「毎授業ですべての子どもを3観点で評価することには、無理があります。重要なのは、教員が自分なりの評価計画を立てることです。例えば、体育科ではよくチームで活動しますが、1時間で全チームを評価しようとするのではなく、『今日はAとBのチームを確認しよう』と決めるのです。それは、ほかのチームを一切見ないということではありません。子どもの学びが自然に見えてきた時に、その姿を評価すればよいのです」

文部科学省が示した「新しい学習指導要領等が目指す姿」には、主体的な姿勢には「思いやりなど、人間性等に関するもの」が含まれている。そうした人間性等も、教員の声かけによって教科指導の中で高めることができると、玉置先生は語る。

「例えば、グループのメンバーをサポートしたり、クラス全員で協力したりする子どもの姿を、教員が積極的に評価すれば、子どもは協働性の大切さに気づくでしょう。教員が子どもの姿をつぶさに見取することで、人間性は一層育まれていきます」

### カリマネの視点での授業づくり

## 外部専門家の客観的な指摘がカリマネの質を高める

同校が考える、学習評価の質を向上させる鍵は、2つある。

1つは、学年間や教材間を貫く汎用スキルと、各教科固有のスキルを、カリキュラム・マネジメントの視点

で整理して関連性を示すことだ。同校ではこれを「ラーニングスキルリスト」と名づけ、評価の場面で活用している。例えば、「言語能力」は、算数科では「記録」、社会科では「プレゼンテーション」などが当てはまる。それらを必要に応じて活用している姿を、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度の評価と結びつけている。

もう1つは、実践研究のアドバイスを行う外部の専門家が存在だ。同校には、元文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の井上一郎氏が、アドバイザーとして10年以上かかわっている。

「全国の様々な学校の実践を見ている外部の専門家から客観的な指摘を得られることで、本校では10年以上も教育方針を貫くことができています。現在、井上氏は、年に5～6回来校し、教育動向についての解説や、教員個別に指導案の書き方のアドバイスなどをしてもらっています。外部専門家の見識に触れることで刺激を受け、先生方にも意欲の高まりが見られます」（鈴木校長）

### 3観点評価の今後に向けて

## 評価の3観点化で期待される教員の役割の転換

約10年にわたり子どもの自主的学習を進めてきた同校では、教員の役割としてファシリテーションの比重が大きくなっているという。今後、3観点での評価が定着することで、ティーチングの比重はさらに下がり、指導の意識転換がさらに進むだろうと、玉置先生は指摘する。

「教員の役割には、ティーチング（指導）、ファシリテーション（支援）、コーディネート（調整）があると思います。その中で、ファシリテーションは、従来のように知識・技能を教員が一

方的に教えるのではなく、学習が停滞している子どもを支援するというイメージで捉えています。たとえば言うなら、階段の踊り場で『このまま上って行って、ゴールにたどり着ける?』と声をかける役割です。目標を達成できるよう、問い直したり、学び直しを促したりしながら、子どもの主体的な学びを実現させていくことを目指します」

コーディネートは、学習環境を整備することだ。同校では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の進め方として、まず1人で学び、グループで学び、全体で考えを深めるという流れを基本としている。「ここはペアで深めた方がよい」「最初からグループで話し合わせた方が効果上がりそうだ」など、子どもの実態に応じて判断するのが、コーディネーターとしての教員の役割だ。ほかに、外部講師をどのタイミングで招くかの判断も、教員の役割となる。

指導と評価の再編に際して重要な点を、鈴木校長はこう語る。

「教員は、つい『先に知識や考え方を教えておけば効率的だ』と思いがちですが、子どもの中で課題が明確になってから、その解決に向けて学び、振り返り、学習方法を改善していくことで、学習の質は上がっていきます。そのように、子どもが主体性を持って学ぶ仕組みを校内に整備することが、校長としての私の役目です。子どもの学びも教員の学びも、基本的には同じです。教員が課題意識を持ち、主体的に新たな指導法や評価方法を学ぶことが重要だと考えています」

3観点の評価への移行により、教員には子どもの主体的な学習をより後押しする役割が求められる。その実現に向けて、学習内容の精選や教科横断の学習を進めるためのカリキュラム・マネジメントがより重要になっていくだろう。